

第5回 滝沢昌之 フルトリサイタル

フルート、チェロ ピアノによる トリオの世界

滝沢 昌之(フルート) 重松 恵子(チェロ)
岡 直美(ピアノ)

2012年11月28日(水)
開場18:30 開演19:00 あいれふホール

PROGRAM NOTE

トリオニ長調 Hob.XV:16/ハイドン(1732-1809)

I.Allegro - II.Andantino piu tosto Allegretto - III.Vivace assai

オーストリアの作曲家。モーツァルトやベートーヴェンが敬愛し、古典主義音楽の中心的な課題ともいべきソナタ形式を確立した。ユーモアのセンス、軽快さ、静穏さがハイドンの味わいで、戯れたり、興奮させたり、笑いを引き起こしたり、あらゆる衝動が知性を伴って歌われる。明るく屈託のない第1楽章は、厳格なソナタ形式の中で柔軟に転調を繰り返して、躍動感がある。第2楽章は二短調で書かれ、穏やかな中にも憂いを帯びていて、静寂というよりもむしろ動きを持った楽章。属和音で半終止ののち、第3楽章へ。のびのびと闊達な3楽章は、チェロとピアノで始まるアウフタクトからのモチーフが終始貫徹よく、ハイドン先生の包容力とユーモアを物語る。

トリオ/マルティヌー(1890-1959)

I.Poco Allegretto - II.Adagio - III.Andante~Allegretto scherzando

チェコの作曲家。プラハからパリ、アメリカと活動の場が変わる人生を送る。この作品は1944年、ニュージャージー州のリッジフィールドで作曲。翌年にはフルートとピアノのためのFirst Sonataが作曲されたが、それを予感させる程に類似している。第1楽章はソナタ形式で書かれ、裝飾音で飾られた明るく楽しい主題が魅力。第2楽章は長いピアノの序奏で始まり、深みのある和声と対位法的に処理された各楽器の旋律線が浮かび沈みして美しい。第3楽章は短いフルートの序奏部を持ち、すぐに楽しく躍動する主題が現れ、流動的な旋律と対比をなす。中間部では静寂の旋律線が安らぎを与え、再現部を経て最後は彼特有のシンクペーションの連続で力強くしめくられる。

——— 休憩15分 ———

トリオ1番 Op.83/リーバーマン(1961-)

I.Allegro - II.Moderato - III.Largo - IV.Presto

アメリカの現代作曲家で、躍動感溢れる超技巧的なテクニクと美しい旋律線の対比が魅力的。第1楽章の主題はアウフタクトの力強いユニゾンで打ち出され、複雑な拍子の組み合わせで発展していく。第2楽章はシリエンヌ風の穏やかな楽章。途中フルートとチェロだけになりゆったりとしたデュエットが流れる。第3楽章は神秘的でミステリアスなモチーフが奏された後、感傷的な歌がたつぷりと時間をかけて歌われる。終楽章は第1楽章の冒頭の主題で用いられた躍動的なリズムで始まり、無窮動のように駆け抜け、短い時間に大きな興奮を伴って全曲を閉じる。フルートにおいては音程や音色の問題から通常現代曲でも効果音としてしか扱われない最高音C,Cis,Dが、スケールの中に現れるのが目新しい。

トリオニ短調 Op.49/メンデルスゾーン(1809-1847)

I.Molto Allegro agitato - II.Andante con moto tranquillo - III.Scherzo
Leggiero e vivace - IV.Finale Allegro assai appassionata

ハンブルクに生まれたドイツロマン派の作曲家、指揮者。このトリオ第1番は1839年に完成した。通常はフルートではなくヴァイオリンで演奏される。この曲を聴いたシューマンは「ベートーヴェン以来、最も偉大なピアノ三重奏曲」だと評し、メンデルスゾーンを「19世紀のモーツァルト、最も輝かしい音楽家」だと称えた。テンポの早い音楽で歌うことができるモーツァルトとメンデルスゾーン、この2人は音楽史上、最大の天才だと言われる。第1楽章は出だしからチェロの主題で始められ、憂鬱と情熱がらねり上げる。第2楽章は夢見のような憧憬が感じられる美しい音楽。この2楽章の美しさがこのトリオを有名にした理由の一つだろう。第3楽章は軽快でまるで妖精の踊りのように流れていて、速いテンポで終始小気味よいパッセージが競演される。第4楽章はロンド形式でピアノが独特のリズムと主題を提示。情熱が奔流のように流れ出す。最終楽章らしく大きな起伏を伴い最後は力強く堂々と全体を締めくくる。